

デジタル複製と意思の尊重をめぐる倫理的ジレンマ

清水 颯 (Hayate Shimizu)・宮原克典 (Katsunori Miyahara)

北海道大学・北海道大学

近年の LLM の発展は、個人の来歴を学習して性格特徴や選好を再現し複製する技術を実際のものにしつつある。私たちはその技術を個人化されたデジタル複製 (personalized digital duplicate; 以下 PDD) と呼ぶ (cf. Danaher & Nyholm 2025)。PDD をめぐる倫理的問題としては、死別等におけるグリーフケアへの影響 (Elder, 2020; Krueger & Osler, 2022; Campbell et al., 2025; Sweeney, 2025b) や、複製による個人の希少性への影響 (Danaher & Nyholm, 2024; Sweeney, 2025a)、寿命を超えた存在期間の延長 (Iglesias et al., 2024)、そして医療における代理判断者の役割 (Earp et al., 2024) などが論じられてきた。

本発表は、高齢化や認知症によって認知能力が著しく低下した人について、本人の過去データから PDD を作成し、それを本人に代わる意思決定に用いることをめぐるジレンマを検討する。認知能力の低下は、発言や選好の一貫性の喪失や、性格の変化 (頑固化・衝動化など) をもたらし、「本来ならその人が言わなそうなこと」に周囲が直面することをしばしば引き起こす。そのため、認知能力が十分に保たれていた時期の価値や長期計画を反映して作成された PDD を用いれば、それを手がかりに「本物の意思」を確認できるのではないか、という直観が働く。しかし、現に生きている本人がそれと正反対の意思を示したとき、私たちは「どちらを本物の意思として尊重すべきか」、というジレンマに直面することになる。

例えば、「高齢化や認知症によって認知能力が低下したら、家族の負担にもなりたくないの、潔く施設に入る」という計画を PDD に記録していた人が、いざその状況になったときに、「施設は嫌だ。家にいたい」と一貫して表明する場面が想定される。PDD は、過去の熟慮と家族負担の軽減を根拠に入居を勧め、当人は在宅継続を望む、といった衝突である。このケースに対して、PDD の意思は認知能力が十全なときの熟慮と価値観に裏打ちされた「本来の自己」の表明であり、それを尊重することが本人の意思尊重だという直観は一見もっともらしく思われる。しかし一方で、PDD の意思は過去の記録にすぎず、現在の身体・感情・生活状況のもとで発せられる当人の選好こそが本人の意思であるため、PDD を優先することは当人の意思を尊重していない、という直観も同様にもっともらしく思える。この二つの対立する直観は、本人の意思の尊重とは、認知能力が低下したとしても当人のいまの欲求に従うことか、それとも認知能力が十全なときに形成された価値を守ることか、という選択を突きつけている。

そこで本発表では、PDD の意思と現在の本人の意思の双方に一見もっともらしい尊重理由が成立しうることを確認したうえで、どちらが「本物」かの決定をその場で下すことは控えるべきだと論じる。暫定的な結論として、PDD は過去の価値と理由を可視化する「参照点」に限定して用いるべきであり、現に生きる本人の現在の環境、身体的

経験、関係性から見えてくるその時々意思を聴取しつつ判断を進めるべきであると論じる。

参考文献

- Danaher, J., & Nyholm, S. (2025). The ethics of personalised digital duplicates: A minimally viable permissibility principle. *AI and Ethics*, 5, 1703–1718. <https://doi.org/10.1007/s43681-024-00513-7>
- . (2024). Digital duplicates and the scarcity problem: Might AI make us less scarce and therefore less valuable? *Philosophy & Technology*, 37, Article 106. <https://doi.org/10.1007/s13347-024-00795-z>
- Sweeney, P. (2025a). Persons, unique value and avatars. *Minds & Machines*, 35, Article 13. <https://doi.org/10.1007/s11023-025-09715-2>
- . (2025b). Creating durable biographies in palliative care: The role of continuing bond avatars. *Philosophy & Technology*, 38, Article 50. <https://doi.org/10.1007/s13347-025-00866-9>
- Iglesias, S., Earp, B. D., Voinea, C., Porsdam Mann, S., Zahiu, A., Jecker, N. S., & Savulescu, J. (2024). Digital doppelgängers and lifespan extension: What matters? *The American Journal of Bioethics*, 25(2), 95–110. <https://doi.org/10.1080/15265161.2024.2416133>
- Earp, B. D., Porsdam Mann, S., Allen, J., Salloch, S., Suren, V., Jongsma, K. R., Braun, M., Wilkinson, D., Sinnott-Armstrong, W., Rid, A., Wendler, D., & Savulescu, J. (2024). A personalized patient preference predictor for substituted judgments in healthcare: Technically feasible and ethically desirable. *The American Journal of Bioethics*, 24(7), 13–26. <https://doi.org/10.1080/15265161.2023.2296402>
- Campbell, S. M., Liu, P., & Nyholm, S. (2025). Can chatbots preserve our relationships with the dead? *Journal of the American Philosophical Association*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1017/apa.2025.1>
- Elder, A. (2020). Conversation from beyond the grave? A Neo-Confucian ethics of chatbots of the dead. *Journal of Applied Philosophy*, 37(1), 73–88. <https://doi.org/10.1111/japp.12369>
- Krueger, J., & Osler, L. (2022). Communing with the dead online: Chatbots, grief, and continuing bonds. *Journal of Consciousness Studies*, 29(9–10), 222–252. <https://doi.org/10.53765/20512201.29.9.222>